



津軽平野の棒掛け（弘前市独狐）

県史編さん民俗部会調査研究員 櫻庭俊美氏撮影

秋餅まわし

清野耕司

（県民生活文化課県史編さんグループ）

青森県内では稲刈りも終わり、稲の棒掛け・ハサ掛けなど見慣れた田んぼの風景が広がっている。弘前と

五所川原のちようど中間に位置する北津軽郡板柳町高増の村上健次郎氏が、平成2年に上梓した『昔の農民のくらし』には、高増地区の大正末から昭和初期を中心とした、かつての農民の生活が詳細に記されている。これによると、刈り取った

コンバインで刈り取り、機械乾燥させるので稲刈り後の田んぼの景色も随分変わってきたようだ。また、稲刈り後は「普通の農家でも旧正月を別途に脱穀した」とあり、冬まで休みなく農作業が続いたことが知れる。そんな中、次のような記述が目を引く。「さて、旧9月28日である。この行事はやはり先祖から伝えられている行事であった。即ち『秋餅』

稲について「当時、まだ『棒掛け』で乾燥する農家は一軒もなく、『嶋立て』そのままにして乾燥するか、或いは田の『くろ』または土手がある田は、土手に掲げて乾燥させたものである。更に七、八分通り乾くと今後は『乳穂』して乾燥させるのである。」とあり、以前は稲の乾燥にも時間がかかったものだが、現在では

あれば、青森でも弘前でも配ったものだ。すると相手方からは必ずお返しのお土産が返ってきたもので、よく私の父が青森に餅を持って行くと、大きな鱒を二、三本背負って来たのを今でも鮮明に記憶している。諺に『持つて行けば戻って来る秋餅コ』とはよく言ったものだ。」津軽地方に限らず、広く青森県内に行われ

ていた秋餅まわしの習俗である。旧暦9月の9の付く日（9日・19日・29日）に、南部地方では「クニチ」といって新米で餅をつけて神様に供える。9月29日を特に「シメクニチ」といって前日に餅をつき神棚に供え、神社へはシトギを持って行く。津軽地方でもほぼ同様に行われ、土地によって9日・19日・29日の3回とも餅をついたり、最後の29日だけ「カナゲセック（刈り上げ節供）」といって餅をついたりする。この餅を親戚・知人などに配るのである。田の神様が餅を背負って山に上る日だから、この日までに稲を刈り上げてしまわなければならないという。稲作の収穫祭は、「穂掛け」「刈り上げ祝」「扱き上げ祝」の三つの過程からなるといわれるが、本県では「刈り上げ祝」としての「クニチ」が中心的な行事で、秋餅まわしはその名残とも考えられる。